

キリストの地上再臨前の大患難

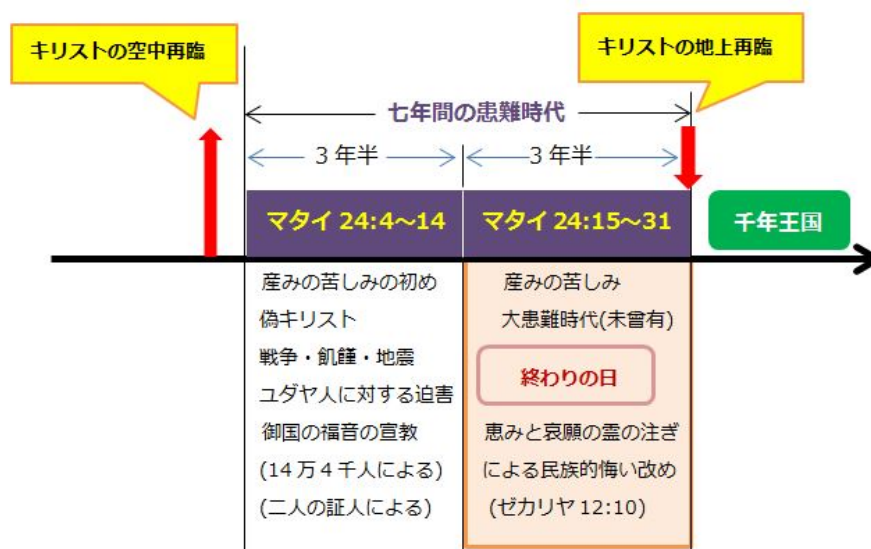


「人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。」(マタイ 24:31、新改訳 2017)

ベレーシート

●前回は、地上再臨の有様とその目的について学びました。キリストが地上再臨されるとき有様は、「雲とともに来られること」、しかも、「天の軍勢を従えて来られること」について学びました。キリストの地上再臨の目的の一つは、キリストが神の敵を鉄の杖をもって滅ぼし、神の国、天の御国、御国をこの地上に打ち建てることです。もう一つの目的は、この地上において、イスラエルの残りの民も(民族的に)加わっての「子羊の婚宴」、ならびに、過越の祝いである大晩餐会が催されるということについても学びました。

●今回は時間軸を少し戻して、キリストの地上再臨の前に起こる大患難時代とイスラエルの民族的回心に至るプロセスについて学びたいと思います。メイン・テキストは、マタイの福音書 24 章を取り上げます。



●マタイの福音書 24～25 章には、イエシュアの語った「終末預言」が一つにまとめられています。ここでは、ダニエルが預言した「七十週の預言」の最後の一週のことを扱われています。特に、マタイの福音書 24 章は、上図にあるように、二つの部分からなっています。それは七年間の患難時代の前半(24:4～14)と後半(24:15～31)の二つです。後者の三年半の期間は「産みの苦しみ」「大患難」「終わりの日」とも呼ばれます。

●七年間におよぶ患難時代と呼ばれるこの時代が始まる前に、すでに教会はキリストの空中再臨によって携挙されています。ですから、イエシュアをメシアと信じている者たちは、この七年の患難時代にはいないことになりますが、やがてキリストの地上再臨と共にこの地上に降りて来ます。その間、地上ではどんなことがなされていたのかを知っておくことは重要です。特に、神に選ばれたイスラエルの民に対する神の真実がどのようにして実現されるのかを知ることは、千年王国を生きる上できわめて重要なことだと信じます。ですから、無関心であってはならないのです。

●七年間の患難時代が置かれているその目的は、**神の民であるイスラエルが最終的に神に立ち返るために、どうしても必要な産みの苦しみのことです。**旧約聖書においては、神の民であるイスラエルとユダの民の回復を繰り返し、繰り返し預言しています。ところが聖書を読んでもそのことになかなか気づきません。それは置換神学の弊害によるものです。イスラエルとか、ユダということばが聖書の中に出て来ると、それをすべて教会、あるいは自分に置き換えて読んでしまうからです。例えば、イザヤ書 60 章 1～3 節を開いて、そこにある「あなた」とはだれのことかを考えてみてください。もしここでの「あなた」を「私」と置き換えて読むなら、4 節以降の解釈は難しくなります。このように、今日の多くのクリスチャンがイスラエルと自分を置き換えて聖書を読んでしまっているのです。ここから脱出するのは容易なことではありません。そもそも聖書のことばを解き明かす牧師たちが神学校において置換神学の影響を多分に受けてしまっているからです。その置換神学のゆがみは神のマスタープランの理解にまで(も)及び、神の永遠のご計画に対する理解は希薄になってしまいます。特にキリストの再臨とその後に来る千年王国の到来の意味することが、置換神学においては意味のない、曖昧な理解となってしまうのです。

1. 患難時代における「産みの苦しみの始め」(前半の3年半)

【新改訳 2017】マタイの福音書 24 章 3～14 節

- 3 イエスがオリーブ山で座っておられると、弟子たちがひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか。あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。」
- 4 そこでイエスは彼らに答えられた。「人に惑わされないように気をつけなさい。
- 5 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わします。
- 6 また、戦争や戦争のうわさを聞くこととなりますが、気をつけて、うろたえないようにしなさい。そういうことは必ず起こりますが、まだ終わりではありません。
- 7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで飢饉と地震が起こります。
- 8 しかし、これらはすべて産みの苦しみの始まりなのです。
- 9 そのとき、人々はあなたがたを苦しみにあわせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたは

すべての国の人々に憎まれます。

10 そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。

11 また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。

12 不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。

13 しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。

14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。

●2節でイエシュアが神殿の崩壊について語られた後で、弟子たちはひそかにイエシュアのみもとに来て尋ねました。「いつ、そのようなことが起こるのですか」と。実は、弟子たちは神殿崩壊のみならず、世の終わりに起こるすべてのことを含めて質問したのです。というのは、「そのようなこと」とは原文では複数形になっていることと、3節で「あなたが来られる時」と「世が終わる時」ということばが一つの冠詞で括られているということからです。つまり、「キリストの来臨(現われ)」(パルーシア **παρουσία**)と、「完結、仕上げ」を意味する「世の終わり(ステレイアス **συντελείας**)」とは、同一の出来事だからです。そのようなときが訪れる前兆はどんなものかと弟子たちはイエシュアに尋ねたのです。それに対するイエシュアの答えは以下のとおりです。

(1) 多くの惑わしが起こる(4~5 節)

『私こそキリストだ』と名乗る者たちが大勢現われて、多くの人々が惑わされる。

(2) 戦争が起こる、戦争のうわさが流布される(6 節)

惑わしのみならず、戦争や戦争のうわさを聞くことになる。そのようなことは必ず起こるというギリシア語の「デイ」(**δεῖ**)が使われています(6 節)。これは神の必然を意味します。イエシュアがザアカイの「家に泊まることにしてある」(ルカ 19:5)という箇所や、イエシュアがサマリヤを通過して行かなければならなかった箇所(ヨハネ 4:4)にも使われていることを知れば、神の必然のニュアンスが理解できます。

(3) 民族が民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉と地震が起こる(7~8 節)

大きな戦いのことが触れられているだけでなく、飢饉と地震も起こります。しかしこれは「産みの苦しみ」の始まりにすぎません。

(4) イスラエルの民に対する迫害が起こる(9~10 節)

イスラエルの民はすべての国の人々に憎まれるだけでなく、そのことで互いに裏切り、憎み合うようになるとイエシュアは言われます(9~10 節)。なぜすべての国の人々に憎まれるのか、その理由は記されていません。しかし、イスラエルの民(ユダヤ人)は全歴史を通して、ユダヤ人だからという理由だけで人々に憎まれ続けてきたのです。

(5) 偽預言者が大勢現われて人々を惑わす(11 節)

(6) 不法がはびこり、多くの人たちの愛は冷たくなるが、最後まで耐え忍ぶ人は救われる(12~13 節)

(7) 御国の福音が全世界に伝えられ、すべての民族にあかしされる(14 節)

黙示録 11 章 3 節の「二人の証人」、および「14 万 4 千人の証人」。この「14 万 4 千人」とは、教会の携挙後に、神の恵みの選びによって残されたイスラエルの民が「御国の福音」を伝えることで、多くのユダヤ人が救われると考えられます。「二人の証人」も「14 万 4 千人の証し人」も、いずれも世界的規模の働きがなされます。

●これらの出来事は「産みの苦しみの始まり」にすぎないとイエシュアは言われます。これが七年間の患難時代の前半に起こる事です。

2. 患難時代における「産みの痛み」(後半の 3 年半)

●14 節「・ ・それから終わりが来ます」。つまり、本当の「産みの痛み」はこの後に起こります。それは新しい命が誕生するときにどうしても通過しなければならない極度の苦しみのことですが、神の歴史のマスタープランにおいても、新しい世界が生まれるためにはそのような産みの痛みを避けて通ることは出来ません。しかもその痛みは未曾有の苦難であり、「世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難」(24:21)だとイエシュアは語っておられます。

(1) 「獣」と言われる反キリストが神殿の至聖所に立つ

●この未曾有の苦難は、獣と呼ばれる反キリストが神殿の至聖所に立つことによって始まります。

【新改訳 2017】 マタイ 24 章 15～22 節

15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら

—— 読者はよく理解せよ——

16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。

17 屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。

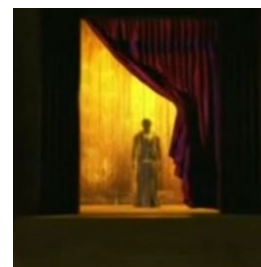
18 畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。

19 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。

20 あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。

21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。

22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。



●以上の箇所は、マルコ 13:14～20 とルカ 21:20～24 にも並行記事があります。16～22 節には、獣と呼ばれる反キリストがその本性を表わす時、どうすれば良いかを指示しています。「山へ逃げなさい」「逃げよ」という命令は現在形です。したがって、逃げて、逃げて、逃げ続けなさいという意味です。獣と呼ばれる反キリ

ストに抵抗することは無駄だというニュアンスです。災難が緊急に迫っているために、家の中の物を持ち出そうとしたり、上着を取りに戻ったりしてはいけないということです。上着は当時とても貴重なものでした。しかし、絶対に後戻りして取りに戻ったら最期、いのち取りになるという警告です。

●妊婦の人や乳飲み子を持つ女のことも触れています。これらの人たちが普通の人たちよりも逃げるのが一層困難な状況になるのは目に見えます。こうした描写によって、イエシュアは終わりの日に起こる患難が現実的なものであることを教えようとされたのです。必然的な出来事と同時に、日数が少なくされることに神の寛容さを見せられます。

【新改訳 2017】 マタイ 24 章 21～22 節

21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。
22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。

●15 節にある「預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』とは、ダニエル書に登場する「あの荒らす者」(8:13)、「荒らす者」(9:27)、「荒らす忌まわしいもの」(11:31、12:11)と関連があります。これらは直接的には、B.C.167 年にエルサレム神殿にゼウス神の祭壇を築き、豚や汚れた動物をいけにえとしてささげたアンティオコス四世・エピファネスのことだと解釈されます。と同時に、その型は、終末に立ち上がる「不法の人」、つまり、獣と呼ばれる反キリストのことを預言したものとも言えます。

●使徒パウロは、「不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるようにと、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」と述べています(Ⅱテサロニケ 2:9～12)。

●ところで、15 節で、なぜ「**読者はよく理解せよ**」とマタイは記したのでしょうか。それは、おそらく、ダニエル書が予告していることを正しく理解し、そこから終末に起こる事を正しく推測するようにと、その福音書を読む者に対してチャレンジを与えているのだと考えられます。

●今、学んでいることは、教会が携挙された後の話です。ですから、主にある者たちは、心配することはないことを知って読まなければなりません。神のイスラエルの民に対する神の真実を貫くための最後のあわれみのときなのです。そこで、再びイエシュアのことばに戻しましょう。

【新改訳 2017】 マタイ 24 章 23～28 節

23 そのとき、だれかが『見よ、ここにキリストがいる』とか『そこにいる』とか言っても、信じてはいけません。
24 偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います。
25 いいですか。わたしはあなたがたに前もって話しました。

26 ですから、たとえだれかが『見よ、キリストは荒野にいる』と言っても、出て行ってはいけません。『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはいけません。

27 人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくのと同様に実現するのです。

28 死体のあるところには、禿鷹が集まります。

●「人の子」、すなわち、キリストの再臨はだれの目にも見える形で来るからです。「死体のあるところには、禿鷹が集まる」ように、その逆の「禿鷹が集まるところには、必ず死体があるように」としたとしても、同じく、キリストの再臨はだれの目にも分かるように来るということがここで強調されています。それゆえ、惑わされないようにと警告されているのです。

(2) 自然界における天変地異

【新改訳 2017】 マタイ 24 章 29～31 節

29 そうした苦難の日々の後、ただちに太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされます。

30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。

31 人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。

●獣と呼ばれる反キリストによる苦難だけでなく、「太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされ」という自然界の天変地異も、キリストの再臨のしるしです。再臨前は、天においても異常な現象が起きるようです。しかし、「**そのとき**」!! (24:30)です。

人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。

●「**悲しみながら**」とは、自分たちがこれまで拒絶してきたイエシュア・メシアが神であることが明らかにされたことによるものです。「悲しむ」と訳された「コプトー」(κοιττω)とは、本来、「切り取る」という意味ですが、ここでは「胸を打って嘆き悲しむ」とか「泣き叫ぶ」という意味です。黙示録 1 章 7 節では「見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかり、アーメン。」とあります。ここにある「嘆く」も「コプトー」(κοιττω)です。

(1) ある者にとっては、自分のこれまでの罪の歩みに対して神に裁かれることの嘆きを意味する。

(2) ある者にとっては、悔い改めに導く悲しみ。特にイスラエルの民が、自分たちに与えられたメシアを長い間拒んできた罪を知って悔い改める、その悲しみを意味します。

●ここで重要なのは、後者の**悔い改めの悲しみ**です。パウロも言っています。「神のみこころに添った悲しみは、

後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」(【新改訳 2017】Ⅱ コリント 7:10)

3. 民族的回心をもたらす「恵みと嘆願の霊」

●ゼカリヤ書 12～14 章には、イスラエルの民がどのようにしてメシアを受容するかが語られていますが、12 章 9～10 節にはこう記されています。

【新改訳 2017】ゼカリヤ書 12 章 9～10 節

9 その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。

10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、**恵みと嘆願の霊**を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

●すでにメシア・イエシュアが復活して昇天された後に聖霊が傾注しています。それによってメシアニック・ジューと異邦人とからなる「教会」(エクレシア)が誕生しましたが、再度、終わりの日に聖霊が傾注される目的は、神の民であるイスラエル(ユダヤ人)が民族的に回心するためです。

●獣と呼ばれる反キリストによる大患難をくぐり抜けた 1/3 のユダヤ人は、キリストの再臨の時に、聖霊の傾注によって、「自分たちが突き刺した者(イエシュア・メシア)」と「主を仰ぎ見」て、主とメシアが一体であったことに霊の目が開かれます。おそらく、十字架にかけられた手の傷や脇の傷を見たのかもしれませんが。そして、メシアを拒絶したことがどんなに大きな罪であったかを示されて「激しく泣く」のです。つまり、尋常ではない「苦しみを伴ったひどい悲しみ」となります。そうした民族的回心がなされるところに、キリストは再臨されるのです。

4. 人の子は御使を通して四方から御国の民を集める

●マタイ 24 章 31 節には、「人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで**四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。**」とあります。今日の最後のポイントは、人の子、すなわちキリストが再臨される時には、ご自身に仕える御使を通して、四方から選びの民が集められるということです。そこにはすでに携挙された教会も、そして神の恵みによって選ばれたイスラエルの民をも含んでいると考えられます。なぜなら、そこでは主にあるユダヤ人と異邦人がひとつになるためです。そのために、御国の構成メンバーを四方から集めるのです。「**四方から**」とは「四隅から」という意味で、「**天の果てから果てまで**」とは同義です。ここに使われている「集める」という動詞は、「集める」という意味の「スナゴー」(συνάγω)に「エピ」(ἐπι)という強意の接頭語がついた「エピスナゴー」(ἐπισυνάγω)という言葉が使われています。ヘブル語では「カーヴァツ」(קָבַץ)という語彙です。単に、集めるというだけ

でなく、御国の食卓に「**招待する、招く**」という意味があります。キリスト再臨後にはこの地上において子羊の婚宴が行われます(黙示録 19:9)。その婚宴は、御使いがパトモス島の孤島に囚われている使徒ヨハネに「子羊の婚宴に招かれた者は幸いです、と書きなさい。」と言われたほどの**喜びの婚宴、祝宴**なのです。